

25 『藏志』の解剖学的表現について

——『阿蘭陀経絡筋脈臟腑図解』との比較

計良吉則

朝廷の官医山脇東洋（一七〇五～六二）が、わが国で初めて官許を得た人体解剖に立ち会ったのは宝暦四年（一七五四）であった。その五年後、この時の解剖所見を含む内容で『藏志』は出版された。

『藏志』の成立過程、内容、文化史的意義などについては、小川氏の先行研究に詳しい。

東洋が解剖を行なった動機は『藏志』の中に「獨怪不見所謂小腸者教試益疑」とあり、類で区別のつかない小腸と大腸は人体ではどうかを確かめたいというものであった。もちろん人体の内景全般について、それまでの伝統的な五臟六腑説の正否を確かめたいというのが真意であったと考えられる。

『藏志』は宝暦九年（一七五九）に乾と坤の二冊、総紙

数八十二枚で出版されたが、紙数のほとんどは附録であり、宝暦四年の解剖に直接関係するのは本文六枚、附図四葉、藏図一枚である。今回は前二者について、その解剖学的表現の特徴について調べた。また、一六八一年頃にまとめられた本木良意の訳書『阿蘭陀経絡筋脈臟腑図解』と比較し、その解剖学的表現の共通点および相違点についても言及したい。

第一に東洋医学との関わりという点に着目する。『藏志』において、「通氣於肝」という表現は気血思想の影響と思われ、脾臓や頭部についての記述がないことは五臟六腑説の影響と考えられる。一方『阿蘭陀：』においても同様に、西洋の解剖学に東洋医学の用語を転用しているものが随所にみられている。しかし両者の決定的な相違点は『藏志』において「手足経絡之説其妄可知矣」、あるいは「肝右四葉左三葉腸疊積十六曲之類亦何肖瀨之藏」と記述され、古来の東洋医学の諸説を明らかに批判している点であり、これは『阿蘭陀：』にはみられない。

第二に現代解剖学との異同という点に着目する。『阿蘭陀：』は翻訳書という性格から、原著の影響でかなり

細かいところに記述が及んでいる。一方『蔵志』は東洋本人が認めるように、その解剖所見は大雑把な内容になっている。例えば本文に「左右肋骨各九枚」、附図に「小者三枚其二差短不出脅」とあるが、胸骨に間接あるいは直接結合するのは、真肋と仮肋を合わせて十対で、他に浮遊肋が二対とする現代解剖学と合わない。また、心臓は本来正中やや左よりに位置するが、附図においては全くの正中に描かれている。さらに「膀胱者上連于腸」とあるのは現代解剖学からは明らかな誤りである。そして脊椎（頸椎から腰椎まで）は本来二十四節であるが「脊骨者背面有鱗如魚其節十有七」と少なくなっているのは斬首された頸椎を数に加えなかったためと推測される。しかし『蔵志』はここに挙げた解剖表現を除くと、現代解剖学からみて正しいと思われる記述が大多数であり、むしろそのことを評価すべきと考える。

第三に『蔵志』を貫く実験精神という点に着目する。『蔵志』は本文の記述が胸部臓器、腹部臓器（消化器系、泌尿生殖器系）、脊椎および四肢という順序になっており、人体解剖の順序と一致しており、そのために臨場感が増

している。また肋骨に対しての「猶椽湊梁」という表現、肺に対しての「猶懸紫錦囊」という表現、肝臓に対しての「濃紫色襞一」という表現、脾臓に対しての「状如馬蹄有皺紋」という表現などは実際に目でみた印象そのものであり、その形状が率直に表現されている。さらに、気管に息を吹き入れてみたという「以管吹氣道則両肺皆怒張鮮澤以蟬翼」は『蔵志』を貫く実験精神の最たるものと思われる。こうした実験精神こそ、『阿蘭陀…』とも異なる点と考えられる。

（順天堂大学医学部医史学研究室）